

日本語教育実習 最終レポート

今まで私が書いたレポートの中に、つまらない授業について書いたレポートがあった。つまらない授業、というのはどういうものだろうか。私たちが使っていた教科書には「先生が一方的に話し続ける授業」「先生が板書するのをひたすら写し続ける授業」と書かれてある。私が今まで実際に体験した「つまらない授業」は「授業を受ける私達学習者の目を見ずに授業を進める先生の授業」、「声が小さい先生の授業」、「進むスピードが遅い授業」である。「目を見ない先生の授業」「声が小さい先生の授業」というのは、受けている側から見て、先生のヤル気がないのかな、私たちのことを考えて授業してくれているのかな、とってしまう授業である。聞く側も授業を聞く気が次第になくなってしまいうので、「つまらない授業」と認識されるのである。「進むスピードが遅い授業」というのは、ずっと同じところをやっていることになるので飽きてしまう授業である。これが当時の私の考える、つまらない授業であった。現在もそういった授業は確かにつまらない授業であると考えている。しかし、教育実習を終え、今の私が考えるつまらない授業は「教師だけが話す授業（教師主体の授業）」である。教育実習を通して、そのことを痛感した。1回目の授業では答え合わせの時に学習者が答えを言うだけで、説明など、ほとんど私が言っていた。2回目の授業ではほとんどが学習者が発言する時間だった。その時の学習者達の、授業に対する参加態度は全然違っていた。「やはり、聞くだけというのはつらい授業だったな」と感じた。1回目の授業ということもあり、私自身も笑顔が少なく、声も大きくなかったため、上記で私が以前に述べた「つまらない授業」を私が実際にやってしまったことになり、とても反省している。

逆に「面白い授業というのは、自分に興味のある授業である」と以前のレポートで書いていた。私は、高校時代の日本史の授業で、石器時代に使われていた「打製石器」と「磨製石器」ではどちらが先に使われていたものか、よく混乱していた。しかし日本史の先生が、「古いほうが打製石器なのは、打製石器がだせえからなんだよ。とダジャレまじりに教えてくださったおかげで、すぐに覚えることができ、忘れた時は「だせえから打製石器が先」、と思いつくことが出来た。日本語の授業を私が押したときも、学習者の興味のあるものを例として出そうと心がけていた。例えば、BIGBANGやジャスティンビーバーといった若者に人気の芸能人を言うことで少しでも覚えやすくなるよう、授業で取り入れた。

私はこの3年間の授業で教える、ということを中心に学んできた。私は日本語教員になることを考えているわけではない。がしかし、これから将来的に「教える」ということは必ず必要になってくる。例えば今でも、授業の中で分からないところがあれば、友達に教えることもある。アルバイトで新しい人が入って来た時に、仕事を教えることもある。2歳の甥っ子に対して、ダメなことを教えることもある。今でも「教える」ということはたくさんあるのだ。「教える」という役割がめぐってきた時に、3年間で学んだことを生かすチャンスはたくさんあると考える。何度も同じことを言うてはいけない。その人に合った教え方で教える。

できていないからといって怒って教えるはいけない。その人ができない原因の全てはその人ではなく、教える側にも原因があるということ。分からない時に質問しやすい関係、雰囲気作り、など多くある。

3年間学んできた日本語教育の授業で最も私が印象に残っている言葉がある。それは横溝先生が以前日本語を教えられていた時に、授業中いつも寝ている学習者がいたときのエピソードで出てきた言葉である。毎回毎回寝ている学習者を前にして、横溝先生は「あなたのために授業をしているのに、どうして寝るんだ。誰のために日本語を教えていると思っているんだ！」そして思わず、「国に帰れ」と言いそうになった（でもギリギリのところと言わなかった）そうである。その後横溝先生は「寝るのにも理由があって、自分がつまらない授業をしているのかもしれない。100%学習者側が悪いという訳ではない。教師側、自分側にも責任がある。」と考えるようになったそうである。私はこの話を聞いた時、「どうしてそのような考えができるのか」不思議でたまらなかった。

今学期、私が教育実習の授業をしていた時に、寝る学習者はいなかったが、よく窓の外ばかりを見ていてあまり、授業には参加しない一番後ろの席の学習者がいた。私は「この50分の授業のために何日も前から準備をして、横溝先生の研究室に行って、パソコンと睨めっこをして、悩んで、教案・教材を作って、この50分にどれだけ時間をかけたと思っているの？授業に参加してよ！」と怒ってしまっていた。しかし、他の実習生の授業では、その同じ学習者がやる気になって発言したり、笑顔で楽しんだりしていた。その姿を見た時に、私は正直悔しかった。「私の授業がつまらなかったからだ」と思い知らされた瞬間だった。全ての授業に対し、つまらなさそうにしていたわけではなく、つまらない授業にだけやる気を見せていなかったのである。その時、私は横溝先生の言葉を思い出した。私は自分の授業が終わった後すぐ、「時間通り、教案通りにピッタリ終わったこと」に満足していたが、その満足感は学習者には共有されていなかった。私は悔しくて、次の授業ではつまらなさそうにしていたその学習者を、絶対に笑顔にさせるという思いで準備をし、臨んだ。また、他の実習生の授業中に見回る時間が何度かあったため、私は積極的にその学習者の所へ行き、分からないところを教えたり、少し世間話をしたりして距離を縮めていった。その結果、その学習者が少しだけ笑ってくれた瞬間があった。きちんと声を出して文章を読んで練習してくれていた。私はその時、本当に嬉しかった。また、その学習者の様子を見るために、前回よりも多く、学習者全体を見回す時間が増えていたと考える。やはり、教案を作るだけではわからないことが多くあり、実際に教えることの難しさや楽しさを感じた。

これから、日本語を教える機会というのは無いかもしれない。しかし、何かを人に教える際には、3年間学んできたことを生かすことが出来ると考える。その人に合った教え方で、分かりやすく、笑顔で教えたい。